君との空

みるく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君との空

【Ｎコード】
Ｎ８５３６Ｘ

【作者名】
みるく

【あらすじ】
ある日、君に出会って
ある日、君に恋をして
ある日、君が怖くなる
ただ・・・あたりまえの日常なだけ。

登場人物紹介

☆瞳

この話の主人公。けっこう天然だったりする。
おまけにピンチのときにものすごい悪知恵が働くので、苦労しないタイプ。
でも、不幸体質なのでけっこうピンチになる。

☆彩音

この話のもう1人の主人公。背がものすごく低く子供っぽい。こいつも天然だ。
実は腹黒かったりするので危険人物だったり。きのこに似ているのでよくきのこといわれている。

☆江藤正輝

瞳と彩音が好きな人。顔立ちが整っており、女子からよく告白されたりするが、ナルシストだ。
キレ症だが、根は優しい。目つきが悪い。

☆郁

友達。かなりのヲタクで3次元に興味なし。変なところに突っかかる

プロローグ

「あー！！！！ひま！！」
1人の少女が運動場をウロウロする。
この日は連合運動会でいろんな学校の人がいるが、友達はみんな競技に出ていて1人だ。
知らない人ばかりで不安になった。
来年、同じ中学になる人もいるんだと思うとわくわくするが、さみしい。
少女は知らない学校のテントまで来ていた。
「蔵原小学校??聞いたことあるような・・・。」
1人で悩んでいると
「翔也！！待てよ！」という声がした。
その方向を見ると
「・・・うわあああああああ！！」
顔立ちがすごい整った少年がいた。
「世界は広いな・・・w」
少女はその少年をせつない目でしか何故か見れなかった。

これが始まり。

本当の恋は人それぞれなのです

たったったと階段を駆け上がる。
「彩音～～！！おっはよ♪」
私は彩音の肩をぽんとたたく。
「瞳！！おはよ～。テンション高いね。」
彩音はびっくりしたように問いかけた。
「んふふ～、なんでだと思う??」
私は意地悪な顔で彩音を見つめた。
彩音は少し考え始めたが、すぐ分かったようだ。
「・・・会ったの！?」
彩音の顔が明るくなってきた。
「そう＾＾」
私はくるっと回った。
彩音なら分かってくれると信じてたよ。
とりあえず2人は彩音のクラスに入った。
彩音は3組、私は4組だ。
2人ともクラスが違うが部活が同じ美術部ということで仲良し。
3組はがやがやとうるさいが、このぐらいがちょうどいい。
「・・・・で。どうだった??」
「どうって・・会っただけだし・・・別に進展は・・・。」
私は今、恋愛中。お相手は年下の少年・・。
「しゃべりなよ～＾＾幼馴染なんでしょ??」
「そうだけどさ・・・、やっぱ無理だわ」
「へ??」
彩音はきょとんとした。
私は壁にもたれた。
「・・・・なんか・・・・無理って気しかしないんだよね。」
私はうつむいた。

恋ってこんなんなのかな??
もっと、ドキドキしたりするもんだと思ってたけど・・・。
何故か・・しない・・・。
会っても嬉しいという思いしかしないし・・・。
本当に好きなのかな??
さすがにこんな思いがあるとは言えない。
「2人とも何はなしてるの??」
郁がやってきた。
郁にはこのことは秘密なので私たちは話をかえることにした。

「恋って・・・どんなのかな??」
「ハイ????」
郁の突然のセリフにびっくりした。
「????・・・2次元に恋した??」
郁はヲタクだ。2次元にしか恋をしない少女。
なのにまさかの発言。
「あたりまえじゃん。3次元なんて・・・。」
「・・・・・。」

神様・・・本当の恋を教えてください。
もう、わけが分かりません!!!

「邪魔・・どいて。」
「あ・・ごめん。」
1人の少年が私の後ろを通った。
中学校に入学してまだ1ヶ月目。
まだ、私は気づいていません。

彼の存在に。

たいてい馬鹿な話の後にまじめな話がくるのです

「あちー！！」
あの日はまだ5月だというのに、暑い日だった。
美術室でこつこつと絵を描き続ける部員。
なかには遊んでる人もいる。
「瞳～！！今日さ一緒に帰ろうよ。」
彩音が私にしゃべりかけてきた。
「いいよ??」
私はイスを机の上に置き、荷物をまとめた。
「い、今じゃないよ（（笑　４時半ぐらいかな??」
彩音はクスクス笑いながら時計をじっと見つめた。
私は顔が真っ赤になった。
「・・・・りょーかい！！！」
大きな声で答えた。
今は４時。あと、３０分だ。
荷物をまとめてしまったのですることがない。
そんな私をみんながクスクス笑う。

正直、こういうのは無理だ。

なんていえるわけがないので「笑うな～」とか言ってごまかした。
自分がよく分からない。
とりあえず『天然』で通っているけれど実際は、どうなんだろう。
自分を偽っているような気がする・・。
なんて考えても仕方がない。
頭が馬鹿だからね。

とりあえず今は、３０分まで待つ。
後のことはそれから。

・・・ひまだ・・・。

「帰るぞ～！！！」
多分この声は廊下まで聞こえただろう。
吹奏楽のかたがたすみません。
練習の邪魔になったと思います。
気にしないで続けてください。
「さようなら～」
先輩は今日は来ていないので、別に敬語じゃなくてもいいんだけどね。
学校をでてしばらく歩く続ける。
帰り道は川沿いに沿って歩く。
カモとかいてけっこう楽しい道のりだ。
けっこう進んだところに４つ葉のクローバーがいっぱい生えている場所がある。
私はそこに行ってしゃがみこんだ。
「まだ、あるのかな・・？？」
「・・・・・。」
「どうしたの？？」
うつむく彩音に私は問いかける。
私は不思議でたまらなかった。
「気分・・悪いの？？」
「・・・た・・。」
「は？？」
彩音の言葉がよく聞き取れなかった。
「なんて？？」
私はにやにやしながら聞いた。

「だーかーらー！！」

このあとに続く言葉を誰がそうぞうしただろうか・・・・。
少なくとも私は想像していなかった。
どうせ、しょうもない話だろうと。そう決め付けていたから。

「恋をした！！！！！！」
一瞬世界が静かになったような気がした。
カラスが「かーかー」鳴いている・

今日の空は綺麗だった。

春が終わるころに春が来たようです

「・・・・なんで、黙るのよ。」
神様、さっきの言葉は嘘だといってください。
あの、彩音が恋なんてするわけないですか。
「冗談??」
「本当。」
確かにそんな嘘は言うわけないか。
・・・それを報告するため一緒に帰ることにしたのか。
状況が分かってきたぞ。
「・・で、誰に??」
「だ、誰って!!・・・ヒントは同じクラス・・。」
「・・・私・・・3組の人分からない。」
まだ、中学になって1ヶ月目。
知らない人が半数以上いる。
当てられるはずがない。
「答えろ!!」
「えー?」
明らかにごまかそうとしている彩音。
「答えないとだめ!!」
「瞳の知らない人だよ??」
だったら分からないヒント出すな!!と言いたいがあえて我慢。
私は立ち上がった。
彩音はきょろきょろとあたりを見渡し、誰もいないことを確認すると、耳元でこっそり言った。
「江藤・・・。」

冷たい風が通った。
よかった、まだ5月だ。
彩音の顔がみるみる赤くなっていく。
頬が赤くなるのは興奮している証。
私はため息をついた。
そして目をつぶって夕日のほうを向いた。
そして大きく息を吸って叫んだ。

「誰やねんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん！！！！！」

「知らないよね。ごめん。」
彩音は謝った。
私は彩音のほうを向いた。
彩音は感想やらをまっているようだ。
私は彩音をじっと見つめてこう言った。
「今度会わせて。」
「！！！！いいよ！」

そのあとしばらく話をした。
「今度、席替えがあるんだ。」
「となりになるといいね。」
実のところどうでもいいｗｗ
でも、彩音が楽しそうだからいいや。
私には関係ないけど。
恋か～、と考えてしまった。

でも、私は・・年下の川田が好きだから・・・・。

そう自分に言い聞かせたけど、
何故か心が痛い。
もしかしたらそのとき、私の心は気づいていたかもしれない。

その、江藤に私が恋をするってことを・・・・。

結果がよければ信じます

吹奏楽の影にいる美術部。
吹奏楽が表ならば、美術部は裏である。
誰もそんなこと言ってないけどね。でもなんとなくそう思ったりする。

また先輩がいない部室。
1年生ががやがやと吹奏楽に負けないほどの声を出している。
「キャーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！かっこいい！！」
腐な声が聞こえるのは気のせいということで。
「ひっとみ～＾＾」
彩音がニヤニヤしながら私のほうに来た。
こういう顔をしているときはたいてい恋愛がらみだ。
どうでもいいんだけど・・てか、今は絵を描きたいんですけど！！
ここは無視をしよう。ということで絵をかく私。
「瞳が無視するよ～。」
明らか悪者扱い。
「何？？」
「あのね～＾＾」
顔がきもいぞ、彩音。
「タロットって知ってる？？」
「タロット？？」
そういえば前、なんかの漫画であったな・・・。
「で！！それがどうしたの？？」
私は席を立ち上がった。
その瞬間にイスが倒れて、ガターン！！というでかい音が美術室内

に響いた。
みんなはびっくりしてこっちを見ている。
「大丈夫??」
心優しいサクラは心配そうに聞いてくれた。
「ありがと～。大丈夫だよ。」
私は爽やかな笑顔で返した。

サクラは私と同じクラスの子。
出席番号が近いのですぐ仲良くなった。
おまけに賢い。

ちなみに彩音はサクラとは反対に大爆笑をしている。
ふざけた奴だ。
「あはは!!・・・じゃあ、タロットやろう!!」
「・・・・・はーい。」
タロットのやり方はものすごく簡単だ。
適当に分けてまた1つにまとめたらいいだけ。
でもカードの絵柄の意味を理解するのが大変だ。
「このタロットはどこで買ったの??」
「ジュースについてきた。」
彩音はカードを並べながら答えた。
ダンボールの上でやっているのである意味難しい。
彩音は結果を確認した。
「普通だな～。」
苦笑いだった。
「瞳もやりなよ。」
私は説明書の通りにカードを並べる。
「好きな人を思い浮かべるんだよ。」
彩音のアドバイス。
好きな人か・・・。

私は好きな人を思い浮かべた。
でも・・でてきたのは
連運のときに出会った人。
な、何で？？？？
てか、今まで忘れていた人が何でいきなり！！
・・・この人で占うか。
「あー。」
結果を見た彩音ががっかりそうに言った。
「現在の状況は普通なのかな？？」
2人ともいまいちよく分かっていない。
「近い未来が・・・教皇だから・・・信頼関係があるって！！」
「へー。」
どうせ知らない人を占っているんだし、どうでもいいわ。
「で！！遠い未来？？が女教皇の逆さま・・・。」
彩音の顔が曇った。
「？？」
彩音は決意したような顔になって言った。
「残酷、身勝手・・・。」
もとからシーンとしているがもっと静かになったような気がする。
「へー。」
私は興味のない様に言った。
「へーって、大変だよ！！これは。」
「たいへんだね～。」
「・・・・・・。」
ついに黙った彩音。
私は女教皇が逆さまになっているカードを見つめた。
別にあの人のことが好きじゃないし。
占いはいい結果だけ信じればいいんだよ。

そのときの私はこの結果を大して気にしなかったが

このタロットの結果が、私の思いの結末を意味していたんだ・・・・・

。

「あ・・・。」

「どうしたの??」

「あさって、席替え・・・・。」

悪い結果は信じません

「席替え～！！？？」
私は目を丸くしてびっくりした。
「そ、そうだよ！！どうしよう！」
彩音は顔が真っ青だ。
別にあわてることではないんだけど。
「占おう！！」
私はとっさに言ってしまった。
彩音は震える手でカードをシャッフルし始めた。
別にこれで決まるわけではないけど、今はこれにしか頼れない。
彩音は真剣だ。
私はとにかくそれを見守った。
「できた・・・。」
後はめくるだけ・・・。
彩音は恐る恐るカードをめくった。
せめて、これでいい結果がでて、気持ちが軽くなれば・・・。
と考えたが、現実は厳しい。

『離別』

カードはその意味をさしていた。
彩音はかたまってしまった。
空気が思い。
私はなんて声をかければいいのか分からなかった。
「大丈夫だよ。どうせ占いなんだし。」
占いだって事は分かっているが神様に見放された気分。
「あははは・・・。終わった・・・。」

彩音はそのまま帰ってしまった。
郁はそんな彩音を見て
「ケンカしたの??」
と聞いてきた。
「違うけど・・。」
気力が残っていない。
いや、本当どうしましょうかね。
席替えがこんな恐ろしいことになるとは。
恋って怖いわ。気をつけないと。

そんなこんなで翌日・・・・。

私はゆっくりと彩音の教室に入った。
席替えをしたから席が替わっている。
彩音を探したら、一番後ろの席にいた。
となりの席の人はうつぶせになって寝ている。
「あ、彩音〜??」
私は恐る恐る声をかけた。
あー!!こういうの無理!!!!!
彩音はこっちを向いた。
ん??なんか表情が生き生きしているぞ。
彩音は私の耳元でささやいた。

「となりになった^^」

悪い結果は信じません（後書き）

この出来事が原因で恐ろしいことが起きます。
続きをお楽しみに＾＾

ウザイときは笑顔で接しましょう（前書き）

ウザイときは笑顔で接しましょう

「え・・・・・。」
一体、昨日の落ち込み具合はどこへ行ったのだろう。
むかつくぐらいにテンションがあがっている。
こういうやつってすごいむかつくんですけど。
まぁ・・・それはさておき。
「よかったね。」
笑顔で祝った。
「私って運がいいのかな～＾＾」
どうせ私は運が悪いですよ。
本当、テンションがありえないぐらいにあがってるな。
良いを通り越してウザイ。
彩音はえらそうにイスに座った。
おまけに足まで組んでいる。
誰が、彩音をこんなんにしたんでしょうか。

・・・・となりのあいつだ。

彩音がウザイ発言を繰り返していたら
となりの・・江藤が起き上がった。
ボーっとしている。
ワックスで固めているのか、妙に髪の毛が立っている。
平成生まれって感じがする。
私がじーと見ているのに気づいたのか、こっちを向いた。
けっこう顔立ちが整っている。
というか、イケメンです。
彩音の動きが止まった。

江藤は私の顔を見つめた。
顔を見られるのがあんまりなれていないのでびっくりして顔が赤くなった気がした。
「江藤??」
彩音は不思議そうに江藤を見た。
江藤は彩音のほうを向いてこういった。

「こいつ、誰???」

私のほうを指差している。
目つき悪ッ!!!じゃなくて!!
一言目が「こいつ、誰???」って失礼な!!
確かにお互い知らないけれども、もっと別に上品な言い方があるはずだろ!!

こいつ・・・苦手だ・・・。

「飯島瞳っていう私の友達。」
彩音がとっさに質問に答えた。
そこへ同じ美術部の梨花がやってきた。
「3人とも何してるの〜??」
のほほんとした子だ。
「挨拶・・。」
私は不機嫌に答えた。
「こんな奴、このクラスにいたか??」
腹立つ質問をする江藤。
殴っていいですか??
「3組の学級委員さんだよ〜^^」

梨花が余計なことを言った。
それ、要らない情報（（涙

私は、学級委員をする人がいなかったのでなんとなくなった。
クラスをまとめたいという気持ちもあったが。
ちなみに、男子は、仲原太郎だ。

「ふーん・・・。」
江藤が何かを考え始めた。
嫌な予感がする・・・・。
「じゃあ・・ヘタレ委員だな！！」
自信たっぷりの表情。
私は言葉をなくした。
「へ・・・ヘタレ・・？」
彩音と梨花が唖然としている。
私は・・・
「おい・・・ヘタレって・・・私はヘタレじゃないわあああああああああ！！！！」
怒りが頂点に達した。

そのとき、江藤は一瞬笑った。

「！！！」
その笑顔をどこかで見たことがある・・。
そうだ、あの時・・・連運・・。
あの人だ！！！
私は焦りと怒りと嬉しさがそのとき混ざっていた。

このとき・・運命の歯車が動き出した・・・・。

ウザイときは笑顔で接しましょう（後書き）

やっと、再会までいったぜ♪

神様に無理なお願いは控えましょう

「はあああああああああああああああ・・・・・。」
なんという最悪な出会いなのだろうか・・・・。
あんなにウザイ奴だとは思わなかった。
ナルシだったし。
彩音には悪いけど、いけ好かない奴だったな！！
神様！！私はこんな願い事はしていません！！

昨年。
京都の神社に行った。
そこで出会いを求めて縁結びの神様にお願いした。
「素敵な人と出会いますように・・！」

出会いはあったけどさ、何気に。
あんな風の奴じゃねーよ！！！
神様に見捨てられた。
終わった・・・・。
「瞳？？顔色悪いよ？？」

サクラが心配そうにしている。

「大丈夫です～。」

どうしましょうか。

あなたが知らないことはたくさんあるのです

「ごめん・・・。」
また1人ふってしまった・・・。
「何で！！？？江藤は誰とでも付き合ってくれるんでしょ？？」
少女は涙目になりながらさけんだ。
俺は少女の目をじっと見る。
「・・・・・彼女がいるんだ・・・・・。」
「！！！！！！」
「だから・・俺は信濃と付き合えない・・。」
信濃という少女は納得したのか「分かった・・・。」と言って去ってしまった。
1人になった。
人の気持ちに答えられないというのは、なんだか悲しすぎる・・・。
俺は・・・・・・―。

「彩音～！！」
私は彩音を探す。
明日は遠足の買出しがある。

遠足ではバーベキュウをするんだよね！！
お肉をいっぱい買わないと。
じゃなくて、今は彩音を探してるんだった。
部活中にどこに行ったんだ??あいつ。
ふと、3組を見る。
彩音がボーっとしていた。
ガラガラ
「彩音??」
私はいつもと様子が違う感じがした。
彩音はこっとを向いた。目が赤い。
「瞳・・・・。」
彩音はこっちにきた。
「江藤ね・・・彼女いるんだって・・・。」
「え???」
声が震えている。
彩音は1枚の紙を持っていた。
「それは??」
恐る恐る聞く。
まさか告白したんじゃないよね??
それはちょっと急すぎるよ。
「る・・・。」
「ん?」

「江藤のプロフィール。」

「は??」
予想外の答え。
「ここに書いてたの!彼女がいるって!!」
「・・・・・。」
なんだふられたんじゃないのか・・。
なんだかほっとした。
彼女がいてもふられてなかったらまだ希望はある。
私はそういうと、彩音は笑った。
「そうだよね・・大丈夫!!ありがとう。」
2人は作戦を立て始めた。

その会話を

信濃が見ていたとは知らずに・・・。

普段しないことをすると失敗するのです

今日はいよいよ買出しだ！！
彩音は江藤と同じ班なので一緒に行けるらしい。
そのせいか、着ていく服ですっごい悩んだとか。
私は別に好きな人と同じ班じゃないし（てか、いない）、適当にいつものの服を着ていくことにした。
たいがい、班の待ち合わせ場所は学校の前。
私が自転車で行くと、すでにたくさんの人。
道路にはみ出てしまって、先生が注意。
その中に彩音もいた。その斜め後ろに江藤も・・・（（苦笑

げっ！！！
江藤の服かっこいいけど、目がチカチカする！！
最近の男子ってあんな服着るのか・・・。
小学校のときはみんなジャージだったのに。
彩音はおしゃれしてきたんだろうけどあいつの近くにいたら、ダサく見える。
私は班のみんなを探す。
何気にみんな近くにいた。
とりあえず、全員そろったから出発した。

し、心臓の音がすごく大きいよ・・・。
こんなに近くにいる。
しかも私服だし・・・・。
「青石??」
江藤が声をかけてきた。
私はとっさに振り向いた。
顔・・・真っ赤じゃなかったらいいな。
「お前、チビだから見えなかったし。」
江藤は笑いながらこっちにくる。
「ち、チビ!!??」
最悪だ・・・・。
「・・・・お前、私服ダサｗｗ」
江藤は私の服をじろじろ見ながら言う。
「悪かったな!!」
私は怒ったふりをする。
お、おかしいな・・・おしゃれしてきたのに。
青色のワンピース。
手にはみずいろのシュシュ。
江藤は優しい女の子が好きだって言うから優しい感じにしたんだけどな～。
失敗だ・・・。
「よし!!行くか♪」
「う、うん!!」
私の班は出発した。
私は必死に江藤の後をついていった。
男の子ってこぐの速いな・・・。
私が遅いのかわからないけれども、速すぎて違う世界の人みたい。

何故か、涙がでちゃう・・・。

イケメンがすることを真似しても意味がありません

「だあああああああああ！！！！！！みんなどこ？？？」
店内で１人叫ぶ少女。

私だよ☆★

お客さんがこっちをじろじろ見てくる。
いや～、恥ずかしいな～・・・。
みんな、どこ？？？？？？？
それほど広くはないが見つからない。

「瞳！！」
サクラが見つけてくれた。
「サークラー！！！！！！」
私はサクラにすがりついた。
班の男子が来た。
「迷子になるとか、ばかじゃねーの？」
なんて、ひどい言葉なんだ。
ちなみに買い物かごの中は肉でいっぱいだ。
けっこう、買ったみたいだ。
「フルーツポンチしようよ。」
私は目を輝かせていった。
「いいね～。サイダーはどこだ？？」
サイダーを探す６人組。
周りから見たら面白いだろうな。

雨が降りそうだ。

「寄り道なしで帰ろうか！！」
「そうだな。」
6人は買ったものを分けて持って帰った。
ちなみに、私はサイダーと肉をちょこっと。
ふらないようにそっと持つ。
黒い雲は私と反対に進んでいった。

そのころ・・彩音は・・。

「キャアアア！！！！かっこいい／／／」
もちろん心のこえである。
江藤はポケットに手を突っ込んでいた。
めっちゃ、カッコいいんですけど～。
他の人がしたらキモイけどね。
「お前、さっきから何じろじろ見てるんだよ・・・。」
江藤が苦笑いで言ってきた。
やべ！！！！！
「・・・・ポケットに手を突っ込んでかっこつけだな～。と思って。
あはは。」
「は～？？ダサい服の奴が言うなよ。」
「ダサくて悪かったな！！！！」
痴話げんかにしか見えない。

遠足楽しみだな・・・・。

失敗も成功もありません

ついに・・・・

遠足だ！！
バーベキュウだ！！
大縄だ！！

駅前で集合。
プリントにそうかいてあったので、私は駅前に行く。
けっこな人が集まっていた。
「瞳！！おはよう！」
郁と彩音が挨拶。
あー、わくわくする！！
遠足って最高！！！！！！！！！！！！
彩音はちらちらと江藤のほうを見ていた。
「誰を見ているのかな？？」
私はがしっと彩音を捕まえる。
「み、見てないよ。」
彩音はあわてている。
「学級委員は全員来ているか確認！！」
先生が大きい声で指示する。
あらやだ。私じゃないの。
しぶしぶ確認。仲原はあぐらをかいている。

手伝えよ・・・。

３組のほうを見ると、彩音が江藤としゃべっている。

ん？

「仲原？？」

「ん？」

「江藤の下の名前って何？？」

「江藤？？好きなのか？」

「ちがう！！」

「ふーん」

「ふーんじゃなくて！！な・ま・え！！！」

「江藤・・・・正輝だけど？？」

「へー・・・。」

初めて下の名前知った・・・。

別に、彩音に聞けばよかったけど、なんとなく仲原に聞いてしまった。

「好きなのか？？」

しつこい。

ここは無視をするのが正解なんだよね。

無視無視。

別に誰を好きになってもいいじゃん。

他の人に言う必要もないし。

他人の好きな人探っても別に変わらないし。

気になるけど。

でも、早く出発してくれ～。

不機嫌だったらそっとしといてあげましょう

肉、最高！！！！！！！！
いいもの買ったな。みんな。
私は迷子になってたから知らないけど。
「瞳～！！そこのお肉焦げそうだからお皿において。」
サクラがてきぱきという。
「ふぁ～い。」
口の中に、ニンジンを入れながら箸をかえて肉をお皿におく。

・・・しかし・・・。
なぜ、煙はずっと私のほうに来るのだろう・・・。
煙に好かれたくないわ！！！
向こう行け！！
うちわで煙をあおぐ。
「ぐは！！飯島！！何すんねん！」
男子が私に文句を言う。
「知るか！！」
私は煙を男子のほうにいくようにする。
「ゲホッ！！」
これ以上したらやばそうなのでいったん中止。
・・・よわｗｗ

ちなみに彩音はそのとき、幸せに浸っていたのであった。
しかし、そんなもの私は知らない。
私は今、煙に夢中なのです☆

「青石さん??」
彩音は振り向く。
そこには1組の信濃さんがいた。
「なんですか??」
「青石さんってお肉焼くの上手だね～。」
「そ、そうかな??」
彩音は顔が赤くなった。
そこへ、他の班のところに行っていた、江藤が帰ってきた。
「!!」
江藤はびっくりしたような顔をしていた。
「信濃さんの班はどこなの??」
なんか嫌な予感がする。
「向こう。」
さびしい顔で答えられた。
目線の先は・・・・江藤・・・。
「し、信濃!!!!」
江藤がでかい声で叫ぶ。
「??」
彩音にはわけが分からなかった・・・。
ただ、江藤と同じサッカー部のごく数名の男子が深刻な顔をしていたのは分かった。
江藤は信濃さんを連れてどこかへ行ってしまった。
一体なんなの????

「おいし～。」
お肉って最高!!
そのころの私はお肉を食べれるという幸せに浸っていた。

「ん？」
向こうに江藤と・・・誰だ??知らない女の子が歩いている。
じっと見ていたら、江藤がこっちを向いた。
あら、やだ。江藤君不機嫌ですわｗｗ
声はかけないでおこう。

しかし・・・なんか・・胸騒ぎがする。

知っていても変わりません

「きゃ！！」
今は鬼ごっこ中。
私はただの鬼・・・。
ちなみに江藤も。

江藤はあのあとすぐ戻ってきた・・・1人で。
何があったかは教えてくれない。

「何で、お前に言わないとだめなん？」
不機嫌だったな。
あれ以上聞かないほうが見のため・・・だけど、気になる。

信濃さんはあの後からあっていない。

「ほい。」
「え！？」

さっきから追いかけてもつかまらない子を江藤が捕まえてくれた。
「あ、ありがとう・・。」
江藤はそのまま走っていく。

「あっやね～！！」
瞳だ・・・。
「そっちも鬼ゴッコか！！」
瞳は息を切らしている。
「そう。」

「へー。」

「そういえば、さっき江藤と知らない子がどかいってたのみたよ。」

「！！」

瞳、知ってたんだ・・・。

「どこ行ってたか知ってる??」

「知らない。機嫌悪そうだったし。」

「そっか。」

ほっとしたような・・してないような・・・。

「やべ！！鬼が来た！！ばーい！」

瞳はどこかへ行ってしまった。

余計なことは聞かないほうがいいでしょう

そもそも知ってても・・別に関係ないし・・。
付き合ってるわけでも家族でもないし・・・。
走るながらふと思う。
私は・・ただの・・・

クラスメイト・・・。

「だああああああああああああああ！！！！！！！！！！」
もう限界だ！！！
気になって仕方がない！
彩音とは反対に私はものすごく気になっていた。
とりあえず、江藤を探す。
「どこだ！！」
全力疾走で走り出す私。
さっきから彩音はテンションが低い！！
私が聞くしかないんだ！
そう思い始めたとき・・・
「あー！いたっ！」
江藤の姿だ！
私は江藤の肩をたたく。
「！！！・・・なんだ、ヘタレか・・鬼かと思ったし。」
「ヘタレじゃない！！」

というのは置いといて。
「さっき、女の子とどこかに行ってたよね～。」
「！お前には関係ない。」
「実はあったりするんだよね＾＾」
私は不敵な笑みを浮かべた。
「？？」
江藤はわけが分からないようだ。
「とりあえず・・教えてもらおうか！」
「関係ないだろっっ！！！！」
「！！？？」

ばれるわけがないはずありません

「へ??」
やべ・・・不機嫌になった・・・。
逃げるか逃げないか。
でも、逃げたらだめなような気がするけど嫌な予感がする。
「あー・・・ごめんごめん^^」
軽い感じであやまった。
「・・・・・。」
こわ!!その目と無言が怖いんですけど!!誰か助けて!!!!!!
江藤はずっと私をにらむ。
に、逃げようかな??
だめだ!!!!逃げたらだめ!!
「お・・怒ってるよね・・。聞かれたくなかったかな??」
私は焦った。
「ごめん・・・・。」
それだけ言って、私はその場から逃げてしまった。
ちくしょう!!
「瞳!!でん!」
・・・・・鬼に捕まった・・・・・。

チラッと江藤のほうをみた。
「!!!」
不機嫌ですオーラーがでてる・・・。
余計なこと聞いちゃったな。
・・・・そうだ。
あの女の子からきけばいい・・・誰だっけ??
結局自由時間には聞けずじまいだった。

その後はずっと3組と行動することはなく
江藤にも彩音にも聞けなかった。
今回の遠足はわけが分からない後悔に襲われたのであった。

「部活には行くなよ。」
担任の先生たちが生徒たちに呼びかける。
今から学校に行く気分じゃないし。
モノレールの中で私はそう思った。
モノレールはゆっくりと私の家に近づいていったのであった。
「さようなら～」
私はサクラと分かれたあとに郁と彩音を見つけた。
「おーい！！」
「瞳だ！」
しばらくしゃべっているといくがいきなり
「今日の江藤さめっちゃ機嫌悪かった。」
ドキ！！
「確かにね・・・。すっごいやつあたりしてたしね。」
ドキ！！
「朝は機嫌よかったけど。」
ドキ！！
「そういえば・・瞳さ、江藤となんかしゃべってたよね。」
ギク！！
「なにしゃべってたの??大丈夫だった?」
ギク！！
「だ、大丈夫だったよ～＾＾；」
明らかに棒読みになった。
「ふーん。」
よかった、ばれなかった。

相談をするのが1番です

ああ・・・
私はどうすればいいのでしょう・・。
余計なことをしなければよかった・・・。

「瞳??元気ないね。」
姉の美咲が心配する。
「ん～、別に・・・・。」
私はパソコンの電源をつける。
最近私はパソコンばかりしている。
何をしているかというと、動画サイトに行ったり、絵の投稿サイトだったり学校のＨＰにも言ってる。
あと、友達のブログなど。

『ササラ様の人生相談』と検索する。
いつも迷ったときはここ。
友達関係や恋愛、家族のことを相談できるし占いもある。
占いはけっこう当たるんだよね。
友達関係相談をクリック。

『今日は遠足があったんですけどそこでいろいろあって友達が好きな男子に余計なことをきいちゃって・・、すごく不機嫌になったんです。友達はそれを心配していてとても私のせいだとはいえないんです。友達には隠し事はしたくないし・・・どうすればいいのでしょう・・・。』

具体的にはかけなかったがとりあえずこれでいいか・・。

投稿っとな。
カチッ。

それから1時間ほど別のサイトにいったりして時間つぶし。
「そろそろ見てみるか・。」
たまにめっちゃ早く返信があったりする。
もう一回検索して・・・。
「！！」
あった・・。

『状況はよく分かりませんがあなたが友達に隠し事をしたくないにはよく分かりました。しかし日にちがたってから言うと「何で今更？」となるので言わないほうがいいかも・・。時に身を任せましょう。もしばれても大丈夫です。きっとそんなことでは怒らないでしょう。もし状況が悪化したらまた言ってくださいね。成功を祈ります。』

・・・・・。
だまされたような気もするけど・・いっか。
確かによくよく考えればしょうもないかも。
後は・・江藤の気持ちしだいだね・・。

大丈夫かな・・・。

気にすることはありません

「瞳～、おはよう。」
いつも一緒に学校に行っている、まどか。

まどかは幼馴染で同じ部活。
半分、私が無理矢理入れたんだけどね・・。
見た目はおとなしいけど中身はけっこう・・怖い・・。

「遅くなってごめん！！」
昨日は全然眠れなくて寝坊してしまった。
「瞳、すごいクマだよ！！大丈夫？？」
まどかは心配そうに聞く
「・・・うん・・・。」
急に江藤と彩音が脳裏に浮かんだ。
昨日のことも思い出した。
「・・・そっか・・。昨日の遠足どうだった？？？？」
まどかとは違うクラスだしけっこう離れている。
だから私のクラスとはまた別の時間帯にバーベキュウなどをしていた。
「お肉がすごい美味しかったよ～。」
よだれがでてきた。
「私のところは焦げちゃったんだ。」
「えー！！」

学校に着いた・・・。
江藤と会うかもしれない・・てか・・会うし。
「瞳！！まどか！！おはよう！」
何も知らない彩音が走ってきた。
うあああああ・・どうしましょうか・・。
そうだ！！真実は話さないほうがいいんだ！！
うんうん。
そうしよう。
「き、昨日のバーベキュウはどうだった？」
とりあえずこの話。
「お肉がこげてさ～。」
まどかの班と一緒だし。
「私のところもだよ！！」
まどかは大爆笑。

私はこげた話は嫌なのでそそくさと教室に入る。
「あ！！飯島！！」
朝から嫌な声が聞こえる・・。
同じ学級委員の仲原だ・・・・。
「今日の放課後、委員会あるって。」
「まじか～。」
私は嫌そうな顔をした。
「何をするの？？」
とりあえずきいた。
「昨日の遠足の反省会だってさ。」
「それだったら、お前が仕事をしてくれませんでしたって言うか。」
「それは勘弁して！！」
仕事をしないお前が悪いって言おうとしたけどやめた。
「あ！！江藤だ。」

誰かは分からないけれども誰かがそういった。
私は無意識に逃げる体勢をとってしまった。
江藤が教室に入ってきた。
うげ・・。
サッカー部の男子としゃべっている。
よし!!チャンス!!今のうちに・・。
「あ!ヘタレ。」
「!!!」
見つかった〜〜〜!!こ、殺される!!!!
「あれ??怒らないし。つまんね。」
そういって江藤はどこかに行ってしまった。
「・・・?????」

よく分からない・・あいつが何を考えているのかが分からない。

少なくとも私の胸の鼓動が早くなっていたのは分かった。

これはびっくりして??それとも・・・。

気づくのが遅くてもいいのです

・・・・・。
さっきのは一体なんだったんだろう・・・・。
もしかして恋とかじゃないよね？？？

違う違う！！
きっと、びっくりしてだよ！！
うん・・・そうだきっと。

そもそも、私は彩音という江藤に恋をしている友達がいるんだ！！
だから私は少女マンガで言う・・あれだ・・・友人Ａだ！！
・・・自分で言ったものの傷ついたかも。
あああああああああああ！！！
もう分からないや。

と、授業中考えていた瞳さんでした。

「ひ、瞳？？」
彩音が話しかけてきた。
「ふぁい！！！！！？？？？？私はう、裏切ってなんかいませんよ！！！！！」
「は？？？何の話？？」
・・・やっちまった。
「今日、部活が終わったら正門の前で江藤をみ、見たいんだ・・いいかな？？」
ようするに私について来いというわけか。
「いいよ。」

とりあえず怪しまれないようにＯＫを出した。
わたし・・不自然だったかな??
夕日が長くなってきたような気がする初夏だった。

「く、くるかな??」
彩音はじっと正門を見つめる。
「そもそも、アイツは裏門から帰るんでしょ??意味なくない?」
「くるよきっと。」
彩音は真剣だった。
恋って人を変えるんだね。
「!!!!」
彩音の顔が明るくなった。
「??」
私は目が悪いからよく見えなかったけど、人影がどんどん近づいてくる。
数秒もたてば分かった。

江藤だ。

彩音の予想通り来たのだ。
私はただびっくりするしかなかった。
彩音は急に顔が真っ赤になって、帰ろうとする。
こいつは・・・。
「あ・・ヘタレ。」
江藤がまた私を馬鹿にする。
「誰がへたれじゃあああああ!!!!!!!」
怒ってしまった・・・。
ヘタレって言うあだ名やめてほしいんですけど。
言っても聞かないと思うけど。
「ばーか。」

「！！！」
はらがたつ奴だ。
「ば、ばかやろーーーーーーーーーーーー！！！！」
何で彩音には何も言わないのさ！！！！
そして馬鹿にするな！！
「はは。」
江藤が笑った。
ドキン！！
「・・・・！！！！！！」
え？？なにこれ！！
あ？？う？？
こ、こえだしすぎた？？
ち、違う！！
これは・・・・・恋だ・・・。

周りをよく見ましょう

「瞳・・最低・・。」
教室の端っこで黒いオーラーを出している彩音。
「・・・わざとじゃないんだよ・・。」
教室のど真ん中で正座をしている私。
とりあえず2人は空気が重かった。
原因は4時間前の出来事・・・・

「!!!」
私が3組に行くと、彩音のイスに頭を自分のイスに下半身を乗せて寝ている江藤がいた。
「・・・。」
私は恋をしていたことに気づき顔が赤くなった。
「・・・。」
無言で立っている彩音。
「何をしてるの??こいつ。」
私は江藤を指差しきいた。
彩音はため息をつき、苦笑いで言った。
「イス寝。」
こいつ略しやがった・・。
というのは置いといて。
彩音はじつはさっきから顔がにやけている。
私はなんかむかついたので
「きゃ!!!」

スカートをめくってやった。
我ながら変態だ。
「何をするのよ！！！！！！」
彩音はあわてている。
「なんならもう1回するけど??」
・・・馬鹿だ私は。こんな事を言うから・・
あの悲劇が起こったんだ。
「え??ちょ！！！！！」
思いっきりスカートをめくった。
よし、誰もみていな・・・・
「アアああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」
寝そべっていた江藤の目が見開いている。
待て待て待て！！！！！
何で今、目を開けている！！！
ねるんださあ！！お願いだから目を閉じてください！！
1秒が6秒ほどにかんじるスロー。
頭の中で流れている残念な曲。
みるみる顔が赤くなる彩音と江藤。
私、どうすればいいでしょうか
終わった・・・・・。
と思ったらスカートが元に戻った。マジで終わったし。
「瞳！！変態！！！！！！！！！！！！」
どうやら、江藤が見ていた件については気づいてないようだ。
江藤は寝たふりをする。
ごめんね。

これが原因。

「本当!!ごめん!!」
私は土下座をする。
「・・・・。」
無言の彩音・・・・。
「いいけど。」
ボソッと言われた。よかった。

こんなあたりまえが幸せだったんだ。
だけど・・この幸せを壊したのは私。
罰がきて当然だ・・・・。

周りをよく見ましょう（後書き）

明るい話はここまでだと思います。
次からはちょっと深刻に・・・。

真実は隠してはいけません

「・・み・・・と・・・・・瞳！！」
「ぐはああああああああああ！！！！！！」
誰かの声によって私は起こされた。
ただいま部活中。さすが美術部です。
「やっと起きた。」
おこしてくれたのは郁。
「・・・夢を見た・・。」
「は？？」
「なんか・・失恋したり、チョコレートを江藤が噛み砕いてたり、机に落書きされたり、紙がびりびりにされてたり・・・。」
私は青ざめながら言った。
「・・・リアルな夢ですね・・・。」
明らかにひいている郁。
夢だからどうでもいいけどさ。

今日は、彩音に江藤のことを言う日だ。

さっき決めた。
「あ、彩音？？」
私は震える声で呼んだ。
「何？？」
梨花とじゃれあっている彩音は笑顔で振り向いた。
「いいたいことがあるんだ・・いい？？」
「どーぞ。」
言うぞ！！真実を！！
「じつは私も江藤の事がす、好きなんだ！！！！！！！！！！！！！！！！」

もう・・友達に戻れないかもしれない。
しゃべれないかも知れない。
邪魔されるかもしれない。
それでも・・・真実を・・。

「あ・・そうなんだ!!!やっぱり??かっこいいもんね^^」

「!?」
意外な反応だった。
「お、怒らないの??」
「あたりまえだよ。友達でしょ!?」
な、泣ける。いい友達を持った・・私!!
「じゃあ・・ライバルだね!」
「ら、ライバル?」
私は少し心が痛くなった。
まさかのライバルだとは・・・・・。
私は彩音に勝たなければならない。
譲るなんてなし。もし負けたら・・。
考えたくもない!!
とにかく!!負けるわけにはいかないんだ。
「・・・いや?」
彩音がにやっと笑った。全身に寒気が走る。
「・・嫌じゃない!!」
私は強気で言った。負けたくない!!ただそんな思いで・・。
「分かった。お互い頑張ろうね。」
彩音は笑った。
「うん。」

番外編　君との恋

ーもう、会いたくないー

君の声は何故か震えてて

何故か切なかった・・・。

だけど、その言葉は君の本心なんだよね。

君の気持ちが分からないよ

ただ分かるのは・・・・・

キミハアノコノコトガスキダ

トイウコト。

運命って信じてますか???

君がその子に恋をしたように
私もあなたに恋をした。
それが運命・・・・。

切ないと思うなら私の思いに答えてください。

今、すぐに・・・。

君との空。
君との出会い。
君との笑顔。
君との思い出
君との愛

忘れないよ・・・・。

もう1度君に・・・会いたい。

番外編　君との恋（後書き）

近い先
瞳におこる出来事です！！
お楽しみに。

ライバルは多いいほうがいいのです

彩音はあの日からも普通に接してくれた。
特に変わったことはなく、いつもどおりの生活を送っていた。
そんなときに片思い中の私たちには最悪な休みが来た。

夏休み

「しばらくあえないじゃん！！！！！！！！！！」
なげく彩音とは反対に私は何故か冷静だった。
「あっちも部活があるし大丈夫じゃない？？」
美術部は何気に活動が多い。運動部よりは少ないけど・・・。
もちろんサッカー部もある。
窓からは中庭が見えるのでそこで練習している江藤がみれるというわけだ。
しかし、そこでへりくつを入れるのが彩音だ。
「でも、しゃべれないじゃん・・・。」
頬を膨らませて文句を言う。
私は正論を言われたので返す言葉もない。
ただ時間が過ぎていくだけだ。
「じゃあ、告白してさっさと付き合って一緒に遊べばいいじゃん。」
私はさらりと言った。
彩音は
「いいの？？私が勝って。」
といった。相変わらずむかつくチビだ。
「嫌だ。」
私は無表情で言った。誰かに取られるなんて嫌だし！！
でも、となりの席の彩音は有利だ。

しばらくあえなくても強く印象に残っている。
・・・じゃあ・・私は??
少し仲がよくなってしゃべっただけのヘタレ委員。
印象悪!!何とかしなければ!!!
といってもしようがない。どうしよう。
彩音がいなければ今の状況を保つことはできない。
席替えとかで彩音が江藤としゃべれなくなったら・・・。
考えるだけでもゾッとする。
・・よくよく考えればいっぱいしゃべれるのも今のうち・・私も・・
彩音も・・。
江藤は小学校のときたくさんの女子に告白をされたらしい。
今だってそう、私と彩音のように思いを寄せている人もいれば、す
でに行動をおこしている人もいる。
ふられたからって諦める人なんてそうそういないと思うし・・・。
さきに行動をおこした人が勝ち。恋なんてそういう世界だ。
彩音だってそれを分かっている。
だから・・・・。
「今のうちにたくさんしゃべらないと。」
彩音は真剣だ。私も。
・・・頑張らないと!!!

夏休みまであと2週間のときだった。

「正輝!!ボールなおしてくれ!!」
部長の声に江藤は反応する。
「分かりました!!!」
急いでボールを直す。

その時、ポケットに入れていた携帯がなる。
ちなみ学校には携帯を持ってきてはいけない。
「やべ。」
あわててみる。
『今日、会えるかな??　　美里』
そうかいてあった。
江藤はため息をつき、ボソッとこう言った。
「・・・そろそろ、本当のことといわないとな・・・好きな子ができたから別れてって・・・。」

時間は止まってくれません

ただ恋に臆病なだけじゃ1歩も進めないんだ・・・。
そう自覚し始めた夏休みの近くの日のこと。

「夏休みの予定のプリントを配るで。」
ウザイ顧問が部員にプリントを配りだした。
肉だらけの体系なので見ててうざい。おまけに性格も。
「けっこうあるじゃん。」
郁はプリントを見て目を輝かせた。もちろん私も。
1週間に2回はあるペースだ。ラッキー。
彩音は何かを計算している。あやしい・・・。
「何をしてるの??」
私はそっと覗き込んだ。
「合宿・・・。」
「は??」
「サッカー部の合宿の日を調べてるの!!」
そこまできれなくても・・。
彩音が言うには、江藤は合宿の日を日にちではなく始業式の前の3週間前といったらしい。
めんどくさいこというな。合宿とかどうでもいいや。あえないし。
「合宿って何をするのかな??キャンプファイヤーとか??」
お前が行くんじゃないだろう。
そもそも、合宿でキャンプファイヤーとかはさすがにないだろう。
練習をするんですよ。しかも男だけでしたら暑苦しいだけじゃないか。
「話し聞きなさい!!!!!!!!!!」
「!!!!!!!」

顧問が怒り出した・・。ここは素直に聞くか。
「写真見せてくれるかな??」
まだ妄想に浸っている彩音。おそらく無理だろう。
「今日はここまで。戸締りちゃんとしてや!!!」
今日もウザイ顧問でした。
「ねーねー、知ってる??」
郁がニヤニヤしながら言った。
どうせアニメなどの話だろう。そう思っていたが・・・
「江藤って彼女いるんだって!!」
「「!!!!」」
・・・・・・・・・。
・・・・・マジか!!!??????
さらりと言うなよ〜!!!!!!!!
嘘でしょう!!!???
誰か嘘だといってー。
「なんかこの前、彼女変えたとか言ってた。」
まじかー・・・・前、いたのか!!!!!!!
「でも好きじゃないとか・・なんチャラ・・。」
じゃあ、さっさと別れろ。
我ながら怖いな。うん。
「前の彼女には好きな子ができたとか言って別れて新しい彼女作ったとさ。」
お前はプレイボーイか!!
「そうなんだー。」
私は冷めた目で言った。
そういえば、さっきから彩音の声がきこえないんですけど・・・。
嫌な予感がするのは気のせいですよね???
私は後ろを向いた。
後ろには石になっている彩音。
「わあああああああああああああああああ!!!!!!彩音!!!

！！！！！？？？？？？？」
現実的に言うと放心状態。
おそらく思考回路が壊れたのであろう。
「・・・は！」
気がついたようだ。
「・・・で、何の話？？郁。」
「さっき言ったじゃん。」
「そうなの？？」
聞いたらだめだ！！彩音！
そうして結局聞いた彩音でした。

夏休みやばいとか言ってる場合じゃないし。
ん？？彼女がいるんだったら、夏休みは
遊園地行ったり・・・
映画見に行ったり・・・
サッカーの試合を見に行ったり・・・
家にいったり・・・・
い、家えええええええええええええええええ！！！？？？？？
それはまだ早いよ！！ぜったい！！
「瞳？？」
彩音が不自然な行動をする私を見て変に思ったらしい。
「・・・な、なんでもないよ。」
へんな妄想をしてしまった。馬鹿だ私。
さすがにそれはない！！うん。
・・・だといいけど・・・。
あ！！でも好きじゃないんだったらしないよね。
よかった。これでしないという核心につけたぜ。
さすがのこのことは彩音にはいわないでおこう。
変態よばりはされたくないし。

というへんなことを考えてても時間は過ぎていくのであった・・・。

終わりましたね

「では、終業式を終わります。」
校長先生が長い話をした後はけっこうきつかった。
世間話は正直どうでもいい。それとサッカー部の話はしないでくれ。
今日はほとんど教室にいることが多いので江藤とはしゃべれないだろう。
見ての通り進展のないまま夏休みを迎えるのでした。
通知表とかいらないから江藤としゃべる時間をください。
なんて言えないしね。
私は自分の教室に入るのでした。
「瞳、今日は部活あるの??」
サクラが体育館シューズをロッカーになおしながら聞いてきた。
「あると思うよ。」
私も体育館シューズをなおす。
「そっか~。お弁当忘れたから1回帰るね。」
「了解。」
そのあと、休み時間がきた。
江藤はどこかに行ったらしくていなかった。
「多分・・6組だと思うよ。」
彩音は机にうつぶせになりながら答えた。
「何で瞳は江藤を探してるの??」
梨花は不思議そうに聞いてきた。
「え??いや別に・・いつも隣にいるのにいないなと思って。」
嘘ではない・・と思う。
よく考えればいつも彩音のとなりにいるな、あいつ。
私は江藤のことは何も知らないけど、彩音は私より多く江藤のことを知っているような気がする。

夏休みってなんかひどいな。
恋の邪魔をするもんね。
消極的な人には邪魔をするって軽いいじめじゃん。
積極的な人がうらやましいよ。
「夏休み楽しみだね～。」
空気を読めない郁がきた・・・。
「プール行こうよ！！あ～わくわくする。」
「・・・・そっか。」
明らかさめた目で見る3人組。
そうこうしているうちにチャイムが鳴った。
「バイバイ～。」
そういって私は3組を後にした。
4組にはいって席に座ったところで窓から江藤が見えた。
もう・・しばらく会えないんだな。
そういう思いしかでてこなかった。

「こんにちは・・。」
1番のりで部室に入る。
誰もいない美術室はシーンとしていて不気味だ。
おまけに窓を閉め切っているからか重い空気が流れる。
私はかばんを机に置いて窓を開ける。
向こうの校舎には廊下をウロウロするたくさんの生徒が見える。
4階を見ると階段のほうに江藤の姿が・・。
今から部活なんだろうな。ユニフォーム着てる。
「こんにちはー！！！！！！！！」
郁達3組がきた。
そのあとに4組の私以外のサクラと美咲が来た。
そして5組の佳織が来た。

続々と部員が来たのであった。
そしてみんなでお弁当を広げて昼食に入った。
「夏休みどうする??」
1番楽しみにしている郁が聞いた。
「私たちは塾があるし。」
サクラが答える。
「私も。」
私も答える。
「え??」
残った彩音。どうやら暇人らしい。

夏の暑さが体にしみこんできた最後の日だった。

恋はいきなりなのです

終業式の日。
彼と一言も交わさずに夏休みを迎るはずだったのに。

「あーーーーーーー！！！！忘れ物した！！！！！！！！！」
部室で大声で叫ぶ彩音。
「何を忘れたの？？」
私は聞いた。
「国語のノート。」
あらま。持ってこないはずの物を忘れましたね。
「取りに行くからついてきて。」
「いいよ。」
こうして2人は鍵を取りに職員室に向かうのでした。
職員室に入った。
「あれ？？鍵がない。」
彩音は鍵が置いてあるはずの場所を目を丸くしてみる。
私は身をのり出してみるが確かにない。
「誰かがすでにもっていったのかな？？」
とりあえず私たちは教室に向かった。
あいてなかったら笑えるけど、ないから仕方がない。
1年生の教室は4階にあるので上るのはきつかったりする。
「やっぱりあいてる。」
何故かあいてる教室の中をのぞいて私はびっくりした。
だってそこには江藤がいたのだから。
「「えええええええええええええええええ！！！！！！！！！！！！」」
突然の出来事に2人は大声を上げた。

待て待てなぜあいつがそこにいるんだ？？？？
サッカー部は今、練習をしているはずなのに。
「な、何で？？」
彩音もそういうしかなかったようだ。
「俺がいたらだめなのかよ。」
江藤は苦笑いで言う。
「いいけどさ・・今部活してるんじゃ・・。」
私はもしかして錯覚ではないかと疑ってしまった。
「忘れ物・・したはずなんだけど見つからないし。」
江藤は困った顔になった。
「わ、私も忘れ物したんだ。」
彩音は机の中から国語のノートを取って見せた。
ピンクのノート。
私は江藤の机によって置くに詰まってるんじゃないかとのぞこうとしたら
「勝手に見るなよ。」
江藤がそういった。
「ごめん。」
とっさにあやまってしまった。
「ちなみに中は空っぽです。」
江藤は私のほうを見ながら言った。
私はその声で江藤を見たとき、目が合った・・・。
普通すぐにどっちかが目をそらすはずなのにまったくにそらさない2人。
私は多分、嬉しすぎてそらさなかったんだと思う。
でもさすがに3秒ほどしたらそらしたくなるのが普通。
だけど江藤はそらさなかった。
だけど・・私がそらしちゃった。
顔が熱い。真っ赤だろうな。
「あ・・。そらした。」

「！！！！！」
体温が急上昇したような気がする。
にやけてるかも知れない。
ん？待てよ・・もしかしてアイツはゲームのノリでそらさなかったとかないよね。
うわー。何気にショック。
！別にロマンチックなのを求めてたわけじゃないけどさ。
ゲーム感覚はちょっとね。
「江藤！！あったよ。」
彩音が数学のノートを江藤に見せる。
確かに江藤のだ。
というか、２人ともなんでノートを持ってきてるんですか？？
今日は授業はなかったんですけど。
・・・あえて聞かないでおこう。

そんな感じでちゃんとした今日のいや『人生で最後の』ちゃんとした会話は終わったのでした・・・。

そのときはまさかこれが最後だとは思わなかったよ。
まさか夏休みが終わっても、会話ができないって誰が想像したんだろう。
このときはまだ物足りなかったけどこんなささいな会話が幸せなことだとは思ってもなかった。

重いとはいわないでください

夏休みになったが1回も江藤と会わずに2週間がたった。
「部活黒板に予定を書いてくる〜。」
暑さにやられている私はふらふらしながら美術室を出る。
後ろから彩音が追ってきた。
「今日はサッカー部がいた。」
「まじか！！」
階段を下りながらひそひそ話。
サッカー部にはよく会うが江藤とは会わない。
私たちは2階の渡り廊下を通ろうとしたとき
「「！！！！」」
江藤がベンチに横になっている。
でたアアアアアアアアああああああああああああああ
あああ！！！！！！！！
今日はナンテ幸せなんだろう〜。
「・・・・。」
2人は無言で歩く。すると彩音がいきなり走り出した。
「え？？ちょ！！」
私は彩音を追いかける。
「もうかいてあるし・・・。」
彩音は部活黒板を見ながらつぶやく。
「帰るか・・・。」
「うん・・・。」
無駄な努力をした。
するとまた、彩音は走る。
「おい！！！！」
私は追いかけたとき

「お前らが走ったら廊下がゆれるんですけど！！！！！！」
江藤が不機嫌に起き上がって言った。
「え？？あ・・すみません。」
いきなりのことだったので変に謝ってしまった。
江藤はまた寝転がって寝だした。
「・・・。」
ん？？待てよ？？ゆれるってことは・・・
私は体重が重いってことかい！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
アイツ何気に失礼な奴だな！！！！！！
レディに向かって重いとは。
誰もそんなことは言ってないけど。
夏休みにしゃべったのがこれだけ。
ね？まともな会話じゃないでしょ？？

思いをふけるのもいいですよ

「あついいいいいいいいいいいいいいいいいい。」
今日は彩音の家で遊んでいる。
遊ぶといってもパソコンをしたりして。
「ねーねー。面白い画像とかないの??」
パソコンをいじる私。
「そのパソコンはお父さんのだから変にさわらないでよね。」
彩音がゲームをしながらこっちを見る。
「はいはい。」
常識的なことを言われたのでイラッときた。
とりあえず動画サイトにいく。
「見たいのある??」
彩音に聞いた。
「私の家のだから普通は私が聞くんじゃ。」
彩音はこの不自然さにあきれていた。
「・・・・。」
動画サイトを閉じて学校のＨＰにいった。
もしかしたら日記のところに江藤がのっているかもしれない。
サッカー部はのっていたが江藤の姿はなし。
そもそも、誰が誰だかさっぱり分からない。
んーーーーーーーーー。
よく見ても分からない。それっぽいとかも分からない。
私はあることを思いついた。
江藤の出身校の過去の日記を見ればのってるかも。
４年生のときとかのかわいいレアな写真とか。
まずは検索。
「・・・・・・・。」

見つからなかった。
私は頭をかきながら本名で検索することにした。
『江藤正輝』
もしかしたら小学校のころに所属してたチームとかでヒットするかも。
「・・・・・・・。」
同じ名前はたくさんいたが本人はいなかった。
「だアアあああ！！！！！！！」
私は寝転がりながら叫んだ。
「ウぎゃ！！！」
彩音は私のおたけびにびっくりしたようだ。
「ああ・・・負けたじゃん。」
文句を言ってきた。
「知るか。」
仕方がないので自分の名前で調べてみた。
モデルさんとかがいっぱいいる。
あー、私と違って美人ですね。腹ただしい。
こんな風にかわいかったら・・今頃・・・。
「なに考えてるんだ！！私！」
彩音は無視。
今頃といえば江藤は何をしてるのかな・・？？
・・・まさか彼女とデートとかはないよね。
いやいやいやああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！
考えないでおこう！！嫌なことしか出てこない。
窓から外を眺めた。
中学校は彩音の家から近いが建物でまったく見えない。
夏の風に当たって少し目をつぶってみた。
でてくるのは江藤の顔ばかり。

いつの間にこんなに好きになってたんだろう。
最初はただのむかつく奴だったのに・・・・。
好きだと気づいたらもっと好きになってる。不思議だ。
机の引き出しを勝手にあけてみた。
「!?」
ポエムらしき紙が・・・。・・・気づいていないな。読んでみよう。
「ぷぷぷぷぷーーーーーーーーーーぶ!!!!!」
私の笑いをこらえる声に気づいたのか彩音が紙を取り上げる。
「なに、勝手によんでんねん!!!!!!!!!!」
「彩音もオトメなところがあるんですね~。」
ニヤニヤする私の頭を彩音はたたいた。
「いて!!!」
「勝手にあけるなよ。」
怒り心頭の彩音は紙を引き出しの中にしまった。
ちなみに3枚ほど引き出しのなかにポエムはあった。
ひまだ。

番外編　毛虫との空

君もこの空を見上げてるのかな??
そう考えたくなるほどの青いい空だった。
本日も部活であります。相変わらず2年の先輩はあんまり来ないけれども頑張っております。
「みんな来ないね・・・。」
「うん・・・。」
2人でさみしく正門の前に座ってみんなを待つ・・。私と彩音だ。
今日はサッカー部は午後からしく中庭はさみしい。
運動場ではテニス部が肌を真っ黒にして走り回っている。
「そういえば、江藤って肌が黒い子が好きなんだって・・・。」
「趣味悪いな・。」
ボーっと空を見上げた。雲1つない空。
むかつくほどに綺麗だったな・・・。
「飛行機が飛んでる・・。」
「足元に毛虫がいるね・・・。」
「は・・・?」
彩音の変なセリフに私はかたまった。私はそっと下を見ると・・・
「うぎゃあああああああ!!!!!!毛虫!!」
大きな毛虫がいた。なんて気持ち悪いんだろう!!!
むにゃむにゃと動いている。
「き、きも!!!!!もう、上に上がろうよ!!!」
そうして私たちは階段を上がった。
「・・きもかった・・。」
脳裏に焼き付けられたあの姿はその日、ずっと再生されていたのであった。
「あーもー!!忘れたい!!!」

「あははは。」
笑うなはげ！！そういいたいけれども我慢だ。
・・・なんか眠くなってきたや・・お休み。
「おい！！」
私は深い眠りについたのであった。

ここはどこだ？？向こうに山があるぞ？？行ってみよう！！
・・！！？？ああああああ・・・
毛虫だアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！
うわ！！追いかけてくるよ！！きもい！！
誰か助けてーーーーーーーーーーーーーー！！

「は！！」
目が覚めると美術室だった。
・・よかった・・・。
その日・・帰るときにはペッちゃんこになっていました。

夏休みの思い出なんてありません

「あーーーーーー・・・・・。」
私が学校につくと中庭でサッカーをしている江藤を見つけた。
私には気づかない江藤。なんか面白いな。ドリブルをしている。
どうやったらあんなふうにできるんだろう・・・。不思議だ。
「瞳??」
彩音が上履きを履いて出てきた。こいつはいつも早いな・・・。
「おはよう。」
「セミがいっぱいいるんだよ!!!!!!!!!!」
「何!!??捕まえるぞ!!」
相変わらず馬鹿な話をする2人。そもそも捕まえられないだろう。
私たちは池のほうへ行った。セミの声がうるさい。
「あんな高いところにいる・・・。」
彩音は残念そうに見る。私は彩音の視線の先を見た。確かにセミがいる。
「・・あー。アレは無理。」
なんだかセミに見下されている気分。嫌だな。
セミは鳥じゃないのに空を飛べる。私も飛んでみたいな。
なんてロマンチックなことを考えていた。
「他探そう。」
彩音は体育館のほうへといった。私はとりあえずついていった。
「!!!!!」
木の下のほうで休憩をしているセミを見つけた。悪いけど捕まえますね。
そーっと忍び寄ったと気に感づいたのか逃げられた。
一気に空高くに飛んでいった。まるでさよならのように。
「う・・。」

セミのおしっこが頭にかかった・・・・。不幸だ。

夏休みはこれといっていい思い出がなかった気がする。
印象的なものがないのかな??そんな気がするよ。
とりあえず2学期は体育大会がある。
江藤のかっこいいところをみれて幸せになって翌日からは仲良くなれたらいい・・そう思っていた。
だけど願いというものははかない。
現実というものは残酷。

私は・・・・・。

あなたの知らない話をしましょう

今から私が後で知った話をしましょう。私が知らない話・・・・。

「え・・江藤・・何かな??」

1人の少女は何かわくわくしながら江藤がしゃべるのをまっている。

だが、江藤の顔つきは険しい。

「・・お前・・どういうつもりだよ??」

江藤は低い声でしゃべりだした。少女は顔色を変えた。

「信濃・・俺はお前をふったはずだけどさ。」

江藤はため息をつきながら言った。状況は深刻だ。

トイレの前なのでおじいさんとかがチラッとこっちを見てくる。

「・・私はただ青石さんとしゃべりたかっただけだよ???」

信濃は自信満々の顔つきで答える。江藤は下を向きこう言った。

「じゃあ・・何で俺のほうを見ながらアイツとしゃべるんだ??」

決定的な一言。

「・・それは・・・。」

「・・何かたくらんでるだろう。」

「・・・・。」

黙ったままの信濃についに江藤はついにきれた。

「てめー、ふざけんなよ!!!!!??????」

信濃はびっくりした。

「俺はお前のことを好きではない!!!!!うぬぼれんなよ!!!」

心が痛むようなセリフだ・・。信濃は涙目になった。

「大体なんであいつにちょっかいをかけるんだよ!!あいつは関係ない!!!!!」

「・・・あの子は江藤のことが好きなのよ!!!!!」

信濃はとんでもないことを言った。
「・・・そ、そうなのか??」
江藤は突然のことに目を見開いた。信濃はそのまま女子トイレの中に逃げた。
江藤はこのまま出てくるのを待っても変に期待をさせるだけなので戻っていった。

これが後から聞いた話。私には関係ない、そう思っていたんだけどな・・・。
同じような出来事が1年後に起こるとは知らずにね・・・。

またもやのせきがえです

恐怖の夏休みがついに終わった。
思い出といわれたら、塾ぐらいかな??あんまりいいことなかったような。
はっきり言ってつまらない夏休みだった。プールにはいってないしね。
始業式もつまらなかった。江藤とはしゃべっていない。
しばらく普通の生活が続いた。
2学期が始まって数日後のことだった・・・・。
「・・・どうしよう・・・。」
彩音は渡り廊下で顔を青白くして悩んでいた。そのとなりに私は立っている。
「いつかは必ず来ることだよ・・。」
じつは彩音のクラスでは席替えをすることになった。ようするに江藤と離れるということだ。
1回なったからもうなることはそうそうない。誰もがわかることだ。
「・・・・・。」
黙り込む彩音。あたりまえだ。どうしようもないのだから。
「あのさ・・。」
私は『そんなことで悩むな』といおうとしたが彩音の顔を見て声を止めた。
彩音は涙目になっていた。今にも泣きそうなほど・・・。
それほどつらいことなのかな??私はすでにクラスが違うから分からない・・・。
「・・今までとなりですごく近かった・・。」
彩音が語り始めた。
「なのに・・離れちゃんだよ!!??もうしゃべれないかも!!!

！！！」
彩音の目から涙がこぼれた。
「・・・・。」
私は黙っておくことにしたが、状況が状況なのでこういった。
「別に江藤が死ぬわけでもないし・・・。」
説得力のない言葉。自分でも分かっているがどうしようもない。
だけど・・これが少しでもすくいになればと思った。少しでも・・・。
「だけど・・・。」
まだ駄々をこねる彩音。おもちゃを取り上げられた子供のようだ。
「・・・っ！！あのね！！もしずっと一緒にいられるようになったとするじゃん。」
私の突然の言葉に彩音は目を見開いた。正直自分でも何を言おうとしているのか分からない。
「付き合うことになったとか、結婚することになったとか何でもいい！！」
彩音は涙を拭いた。
「だけどいつかは人は死ぬ。死んだら本当にしゃべれないし会えない。」
「・・あ・・・。」
「だから・・・そんなことでいちいち悩むな！！！会えるんだから！！！」
私は頭をフル回転させて、決定的なことを言った。
彩音は笑った・・・・。
「ありがとう。少し考えすぎていたかも。そ、そうだよね・・。」
切ない笑顔。見ていられなかったけど私は一安心をした。
後は結果だな・・・。
もしものときのために私は手紙でも書いておくか。離れたときように。

彩音はすごく江藤がすきなんだな・・。ちょっと羨ましいかも。
私も好きだけど・・・環境が違う。クラスが違うから・・・。
本当だったら接点がないはずの私と江藤。しゃべれただけでも幸運だと思わなければならない。
そう思うと彩音に感謝がしたくなった。でも照れくさくてできない。
私がもっと大人だったらな・・・・。

思いの結末まであと・・・1ヶ月だとはまだ知らない。

結果はどうせ結果です

私は昨日必死で書いた手紙をかばんの中に入れ、家をでた。
今日は雨だ。これからのことを物語るような空。いやだな。
まどかとの待ち合わせ場所に行くがまだ来ていないようだ。
小学生が集団登校で歩いていくのを見ながら私はため息をついた。
よくよく考えると、彩音と江藤が離れるとこっちにも影響がでる。
どうしようか・・・。
そんなことを考えても今はすでにもう結果がでてる。かえられない。
「瞳～、遅くなってごめん！！」
まどかが走ってきた。スカートがいつもより短いのは気のせい？？
「・・・スカート・・・。」
私が不思議そうに言った。まさかの不良デビュー！！？？
まどかは苦笑いでこう言った。
「いや～、長かったら不良だと思われそうだし。今はさ長いのがはやってるじゃん。」
確かに。何故か最近は、ロンスカといってスカートをずらしてはくのがはやっている。
短いほうがまじめに見えたりするのだ。
「なるほど。そういえば今日はさ、国語があるんだけどさ・・・。」
私はさりげなく話題を変えた。どんどん学校に近づいている。
あーだこーだ言っている間に教室へ。
ざわめいている3組をよそ目に私はとなりの自分のクラスに入った。
サクラたちがいない。いつもならこの時間にはいるはずなのに。
おそらく4組だろう。結果を見に行ったのしか思いつかない。
私はかばんを机に置いて、早歩きで4組に行った。
黒板の前にはたくさんお人が席替えの結果を見ようと集まっている。
私は彩音を探すが見つからない。いつもは見つかるのにね。

「瞳！！」
梨花の声がした。声のしたほうこうを向くとみんながいた。
彩音はいつもどおりの笑顔でしゃべっている。
結果は悪くなかったのかもしれない。私は黒板を見るがそこには衝撃的な結果が。
彩音と江藤は離れている。
江藤のとなりには性格が悪い羽田の名前が・・・。
なんだか嫌な結果になったな。うん・・。励ましの言葉もないよ。
とにかくあの手紙を渡せばいいのかな??私はポケットに手を突っ込む。
「瞳～！！私ねこの班、最高だと思うの！！」
彩音は私にガッツポーズをしながら言ってきた。
彩音は精一杯の笑顔だった。私はどうしようもなかった・・・。
だけど、私は手紙を渡さなかった。
渡したら彩音の我慢が水の泡になりそうだったから・・。こんな私でごめんね。
梨花はそんな私を見て不思議そうだった。私・・今、そんな顔してるのかな??
おそらくしばらくはもう、江藤とはしゃべれないような気がする。
多分。
でも、本当はこうだからいいよね。

つまらないことはやめましょう

結局、私と彩音は席替えから江藤と話せない日々が続いた。
彩音は一言ぐらいはしゃべるけれども、前のようにはいかないそうだ。

「体育大会の種目決めをする。」
体育委員がプリントを配り始めた。だいたい８００メートルなどしんどいのばっかりだ。
文化系の部活の私は綱引きにすることにした。楽だろうし。
そういえば部活対抗リレーで出ないといけないんだっけ？？忘れてた。
走るのはそれだけだよね。うん。
ラッキーなことに私は綱引きに出ることをＯＫしてもらえた。
学年種目は棒引き。
「これ、小学校の運動会のときにした・・・。」
「またかよ・・。」
私と同じ小学校の出身の人たちは文句を言い出した。決まったことだから仕方がないと思うが。
体育委員は「文句を言うな」とだけ言った。
何とか１時間で種目決めは終わった。
私は４組に行き、彩音たちに何にでるかを聞いた。
「私は障害物競走。」
彩音はそう言った。
「私も。」
郁もそう言った。
「私は綱引きだよ。」
梨花は笑顔で言った。

「本当？？私も！！！！！！」
私は感激のあまりに梨花に抱きついてしまった。敵なのにね。
ちなみに彩音いわく江藤は１０００メートルに出るらしい。さっすが！！
「なんか、先生に速いから出たらとか言われて、江藤はいやだって言ったけどすごい頼まれてね、結局でるって言ったんだけど、男子に『えー』って言われて『せっかく、ＯＫしたのに』とかいってた。でるけどね。」らしい。
江藤らしいというか・・江藤だね。
私はとりあえず江藤のほうをみた。男子と楽しそうにしゃべっている。
ん？？女子が何人かいるぞ？？あーーーーーー・・・。うらやましい。
私もあの中に混ざりたいな。無理だけど。
チャイムが鳴った。次は数学だ。
私はその時間、意味不明な呪文を聞いていたのであった。
数学って将来、役に立つのかね？？？変な疑問。
ちなみに４組はただいま英語らしい。あっちも大変だな。
私は問題などはサクラの答えをカンニングしてその時間をすごした。
今日は曇り空だ。
最近は晴れの日が少ない。雨ばっかりでつまらないんだよね。
私はペン回しの練習をした。失敗ばっかでつまらないのでやめた。
そういえば彩音は江藤に教えてもらったとかいってたな。
自慢するために必死に家で練習したとか・・それで怪我したとか・・。どうでもいいけど。
最近はなんだかつまらないので、何か面白いことはないのだろうか。
たとえば・・・江藤に告白をするとか・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・いいこと思いついた♪

プールと意味不明と

思いついたのはいいけど・・これはちょっとやばいかもね・・。
よくよく考えれば恐ろしい内容だな、これは。
私が思いついたというのはこういうのだ。
　　彩音と私で勝負をする。勝ったほうが江藤に告白してＯＫという内容。
あきらかに『だめです警報』がなっております。やめておこうかな。
冗談で言ってみようかな??本当にはしないけどさ。
というわけで私はまどかに言ってみた。最後に冗談ってつけたから大丈夫だよね。
彩音はすごい嫌がったが冗談というとほっとしていた。
郁には言うか言わないか・・・。嫌な予感がするからやめておこう。
そんなこんなでまだプールの最終日だった今日。私のクラスの体育はあきらかに進むのが遅い。
今年のプールは見学になるのが多かったけど、最終日は入れてラッキーだった。
ちなみに彩音は見学だ。ドンマイ。今日は自由が多い。
私は郁とサクラとで追いかけっこをしたりして思いっきり遊んだ。
楽しい!!!
ちなみに半分男子が使っていて半分が女子だ。
男子は友達の水泳帽子を女子のほうに投げたりして遊んでいる。お子様だな。
江藤はというとどこにいるのか分からない。
あんまり見てたら変態扱いをされそうなのでやめておこう。男子はすぐにそういうこと言うし。
「あーやーねー!!!」
私たちは彩音に自慢をするように名前を呼んだ。彩音はみかけによ

らずプールが大好きなのだ。
そして、ついにプールは終了した。
嬉しいような悲しいような。
ちなみにそのプールは2ヵ月後緑色のプールになるのでした（（笑

「ひ、瞳？？？」
彩音が苦笑いで話しかけてきた。
「どうしたの？？」
私は着替えながら言った。
「あのね・・・江藤が私に無関心なの！！！！」
「は？？」
彩音が言うにはこうらしい。
じつは今日は江藤も見学だったらしくて彩音と思いっきりすれ違ったらしい。いつもなら「お前も見学なん？？」とか言われるはずなのに今日は完全に話しかけられなかった。というわけ。
「きっと、水着を忘れたんだよね。そういうことにしておこう！！」
彩音は勝手に自分で解決した。ある意味すげー。
そういえば最近・・江藤としゃべってない。さみしいな。
江藤は別に私としゃべらなくてもどうでもいいんだろうな。
だって最近・・笹川月海ちゃんのことを見てるもん。私はいつの間にか気づいてしまっていた。
いつも楽しそうにしゃべっているし・・・。気づいたのは自分だけど・・・。
私は何故か梨花に相談していた。いつもなら彩音なんだけどね。
「聞いてみる？？」
「え？？」
梨花の突然の言葉に私はびっくりしてしまった。い、今なんていったの？？ええ？？？？？？
「江藤～？？」
待て待て待てー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！！！！！！

それはきいたらだめでしょー！！！！ばれちゃうよ！！

「江藤って月海ちゃんのコト好きなの？？って瞳がいってたよ。実際どうなの？？」

聞いてしまった。江藤は特に反応しない。ん？？なぜだ？？

私は梨花の影からそっと見る・・・。

「別に笹川のコト好きじゃねーよ？？しかも、ここにはいないし。」

「「そうなんだー。」」

私と梨花は安心して大きくうなずいた。って待てええええええええええええええ！！！！！！！！！

『ここにはいないし』ってどう意味じゃ！！！！！気づかんと思ったか！！

意味が分からない。ここにはいないって、このクラスに？？それともこの学校？？

意味不明なことをいいやがって。謎が増えたではないか！！

私はどうすればいいのだー！！！！

ちなみにきづいておりました。

私が頭を抱え込んで悩んでいるのを江藤が見ていたことを。

口止めは大切です

私はあの時の江藤の表情が忘れられない。
にらんでるような・・・切ないような・・・・表情。
それはさておき。今日は体育大会の予行練習であります。最悪だ。
私は適当にボーっとしていたら、郁がやってきた。
「瞳！！？？何で言わなかったの？？」
「はい？？」
私にはわけが分からなかった。何を言っているんだ？？？
「優勝したら告白するんでしょ？？？」
「い？？・・・」
な、何で郁が知ってるの？？？言ってないのに。あーーーーーーーーーーーー・・・。
誰かが言ったな。別に口止めしていなかったし、いいけどさ・・嫌な予感がする。
私が慌てふためいていたら
「ぜったい、告白しろよ！！」
郁はきつめの言葉で言った。マジすか！？
私は郁がサクラたちのもとへいくのただ見いていた。どうしようもなく。
これは告白しないといけないような感じになってきたぞ。どうしましょう。
今、言っても、失恋するだけだ。分かっている。
初めてなので告白はどうすればいいのか分からない。そんな私。
あー・・・・。消えちゃいたい。
消えたらだめだ。江藤と会えなくなっちゃうからそれだけは避けよう。
トイレに行っていた彩音が戻ってきて、真っ白になっている私を見

て不思議そうにした。
・・・・すまん・・・彩音。
何から何まで申し訳なくなってきた。世界中の皆様！！！ごめんなさい！！！！！！
何を謝ってるねんという。わけの分からない感情がめぐる心。
曇り空な心です。ちなみに空は晴れています。むかつくな。
あ！！！優勝なんてそうそうないじゃん！！１チームだけだよ？？
全部で６チームあるしね。ちなみに私は青チームだ。江藤は橙チームだ。
ふふふふ。めったにないのさ！！優勝なんて。６分の１の可能性だ。
ありえない。
とりあえず、みんなには悪いけど２位をねらうとしますか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8536x/

君との空

2011年11月21日22時44分発行